

＜政策科学会 2010 春季公開講演会＞

多文化共生社会を創る！

— 在日外国人支援ゲンバからのメッセージ —

講師 小野田 美 紀氏

NPO 法人外国人就労支援センター 代表

村山 皆さん、ご出席いただきましてありがとうございます。日本は国際化に関していくつかの政策を展開しています。海外からの人たをどのように受け入れるか、受け入れた人たちの間でどうするか。多文化共生ということの現場がどうなっているか。多文化共生というのはある意味では流行りなんですね。アメリカの場合はメルティングという形で政策方針として出しています。カナダはモザイクという形でやっております。日本の多文化共生について労働者の受け入れとの関係でお話になるかと思いますが、その現実と背後にある政策のイメージとか、コンセンサスがどのようなものなのかを含めて考えていただければいいのではないかと思います。よろしくお願いたします。

司会 ありがとうございます。続きまして小野田美紀さんのお話を伺います。NPO 法人外国人就労支援センターというのは愛知県豊橋市にありまして、そこで2003年、大学生時代にボランティア活動として、在日ブラジル人の子弟・児童に学習支援をするボランティア・グループに入られて活動を始められたことが、今回のお話のきっかけとなっています。2005年に団体成立の準備を始められて、2006年に特定非営利法人外国人就労支援センターを設置され、現在に至っています。お話の中で詳しく、魅力的な中身をご紹介いただけると思っております。ではよろしくお願いたします。

小野田 こんにちは。外国人就労支援センターの小野田美紀と申します。ご紹介にありました通り、豊橋からまいりました。愛知県の方はいらっしゃいますか。私、実は豊橋市民じゃないんです。活動が豊橋で、住んでいるのは豊橋市からは静岡県寄りにある新城市といえます。大学が豊橋だったので引き続き豊橋で活動を続けているという感じですよ。

この活動のきっかけになったのは大学生時代ということで、自分の活動の流れを話しながら、皆さんに親近

感を持っていただけたらと思います。18歳で大学に入って、キャンパスライフを楽しんだんですが、はじめは応援団という固いところに入っていて上下関係を学んだのですが、大学に入る前にやりたいと思っていたのはボランティア活動で、学部は国際関係の学部だったので、国際にかかわるようなボランティアをしたいなと思っておりました。19歳の時、大学の授業でのひとりの先生がきっかけでした。その先生の授業を聴いていくうちに、豊橋は製造業が盛んで、車やものづくりが盛んなところで、日本にルーツのある日系ブラジル人たちが、たくさん住んでいるんだと初めて知ったのです。「エッ、ウソ、信じられない」という感じでした。国際活動をしたかと思っていたので海外に行くしかないかと思ってたんです。海外でなくとも身近に国際的なことが起きているんだなとそのとき初めて実感したんです。そんな中で学習支援という、外国人の子どもたちの学校の宿題をみるボランティアに参加しました。そこで部活もやめて専念しようと思い、とても楽しかった時代です。国際関係の学部だったので、その間アメリカに短期留学に行っていて、将来はばく然と海外で活動したいなと思ってたんですが、それよりも行ってみて気づいたのは「自分の近くに外国人とかかわる仕事がある、これからも携わっていききたいな」と、いう思いが強まっていきました。その後ボランティア活動の代表になって、いろんなところで発表したり、自分たちはこういう活動をしているという話をさせてもらううちにギャップが生まれてきたんです。どうしてかというと、日本語を教えるボランティア活動だったんですが、実際に教えていくうちに子どもたちが成長していく中で、いつまでたっても日本語のひらがなを教えている、こんなボランティアでいいのかなという疑問と「あなたたちは学生時代に外国の子どもたちを支援している、すごいね」という周りの反応との距離を感じてしまって、このままじゃいけないと思ったのが大学3年生の頃でした。卒業を控えて就職活動もして

いたんですが、ボランティア活動の方が真剣になってきて、自分の気持ちとのギャップに、何かヒントがもらえたらいいなということで、大阪のエッジという社会起業家のコンペをしているところに行ったんですね。本当に意味のある支援は何なのかなとモヤモヤしていて、そういうことを学べるのではないかと思って、半年くらい通いました。

その時に気づいたのは、活動の中で、あるブラジル人の小学校6年生の男の子が言った言葉でした。その子が日本の学校に行っていて「将来、どんな人間になりたいですか?」という作文の授業で「なんて書いてきたの?」と聞いたら、その子が「僕、適当に書いてきたんだよ」「なんで?」「だってどうせ僕たちは工場で働くんでしょう。日本人はいろんな職業を選べるけど、僕たち、そういう道ではないでしょう」と。その時に私は何も答えられなくて、「ああ…」と思ったんですね。でもその子の立場になって考えてみたんですが、その子の住んでいるところは外国人が住んでいる市営団地で、朝早く、派遣会社からお迎えのバスが来て、お父さん、お母さんがバスに乗って工場に行く。仕事が終わると、またバスで戻ってくる。年齢の若い人たちでも就職先が限られていてアルバイトだったり、工場だったり、今の社会では道が限られているから、そういう環境に育つと、自然と自分もこうなるんだと諦める気持ちになるのもわかるなと思ったんです。でもそれってすごくおかしいと思ったんですね。日本人と同じように日本の勉強をしたり、母国の教育を受けているけど、日本で住んでいる以上、日本人と同じような将来の道筋の選択肢がないと、おかしいのではないかな。そもそも日本に労働力が足りなくて、日本にルーツを持つブラジルの人たちを呼び寄せて働いてもらった。今、不況で派遣切りで母国に戻る人もいますが、それでも定住している人たちが多い。呼び寄せて社会がそうしているのに、子どもたちの将来を考えていないのはおかしい。日本社会が、これからちゃんと考えていかないといけないのではないかなと思いました。そういう気づきを、エッジで学ばせてもらって、その後、ボランティアではなく、ちゃんとしたNPO、会社をつくってやらないとね、とメンバーと話をして、卒業と同時にNPOをつくらうと思ったんです。しかし私は、親に反対されて「何やってんだ、普通に就職しなさい」と言われて別の仕事をする傍ら、外国人学校で日本語や文化を教えたりしていました。1年くらいそういった生活をしつつ、

4年前にNPOを立ち上げて専属で働いています。こういうことが私の流れです。私自身は普通の人で、たまたま大学で気づけて、たまたま大阪に行って今があります。関西という地域は、すごく恵まれているなと思うんですね。愛知県は「NPO、えっ、宗教?」と思われるんですね、今でも。やりにくい閉鎖的な地域なので、大阪とか京都とか関西地区は阪神大震災から、その後、復興するためにいろんなNPOが立ち上がって、自分たちのできることを自分たち市民がやって、ここまで復興してきたという土地なので、進歩している地域だなと感じています。

ここからは愛知県の外国人についての現状と活動に至る背景をお話させていただきたいと思います。今、豊橋市の人口は約38万人、そのうち2万人が外国人です。日系ブラジル人が多い地域は静岡県浜松です。しかし増加率は豊橋の方が多くて、今は不況になりましたが、3年前までは外国人は13000人の人口でした。今は1万人を切っているそうです。京都の方は外国人の人たちが住んでいるのは在日韓国の方が多いですね。豊橋は製造業、静岡も車、スズキとかホンダとかが盛んなので、ブラジルの人たちが、製造業の労働力として住んでいます。

日系ブラジル人が、どうしてたくさん日本に来ているのかということは皆さん、ご存じですか。詳しくお話をさせていただきます。日系外国人は、海外に移住した人、日本人の子孫ですが、現地の外国人と結婚したためにハーフの人、日系人同士で結婚していて、日本人なんだけど、国籍が外国という人も多くいて、日系外国人といっても、いろんな顔だったり、髪の毛とかもさまざまです。そういう人たちが愛知県にたくさん住んでいます。家を買って住み続けている人たちも多いですね。家を安く買えるようになったり、日本語で生活しなくてもよい整備が行政でもされているので、住みやすくなってきています。問題はいくつかありますが、子どもたちの問題が現在、最重要課題ともなっています。

日本は今、過去に例のないようなスピードで、少子高齢化が進んでいます。1年間に生まれる子どもの数が1973年、第二次ベビーブーム以降、ずっと少なくなっていて、出生率が2.14%だったのが、今は半数の1.32%に減ってきています。一人産むか、産まないかという割合ですね。このままほっておくと若い労働者人口が減ってきて、ものづくりや、今後、大変なのは介護ですが、経済とか日本の生活にとって産業分野で労働力不足に

なっていきます。2055年、40年後には、これだけしか生まれず、老人がこれだけたくさんいるという図です。働く人の担い手がなくなる。そのために3つの方法があるといわれています。1つは、今すぐ20歳以上の人が全員子どもを産む。2つ目、日本人が130歳まで生きる。3つ目は外国人の受け入れ。その3つしか方法がないと。現実的な方法は、3番目の外国の人たちに労働力を担ってもらわないといけない。これしかありません。

日本ではこれまで多くの外国人を受け入れてきました。1990年の入管法改正から呼び寄せが始まって、今では豊橋とか静岡、群馬に製造業や車工場で働いている人たちが多くということになっています。はじめは外国人の人たちは単身で日本に働きに来たんですが、日本の治安がよかったとか、住みやすい、食べ物がおいしいとか、さまざまな理由で家族を日本に呼び寄せて暮らす人たちが増えていきました。行政でも通訳を設置したり、広報誌を外国語に翻訳したり、整備を進めて受け入れ体制をやっているんですが、でもまだまだしっかりした体制ではない。現場に携わっている私たちから見ると、まだまだという現状があるなど感じています。外国人労働者は家族の問題など、さまざまな問題を抱えています。外国人の子どもたちの問題、日本の学校に行き、馴染めない問題や、学校に行っていない子どもたちの問題もあります。そのことが地域の大きな関心事になって、皆で、どうにかしていかないといけません。2年前、世界的な大不況で、派遣切りとか、失業者が増えて、日系外国人の人たちにも影響が出できました。国の方では仕事がない、失業手当をもらったり、生活保護を続けていくのも問題になるということ懸念して、政府は、帰国支援を設けて、「一旦ブラジルに帰国しませんか。国からお金を援助するから」という支援策を行いました。豊橋も13000人から1万人弱に減ったというのは、この支援策を使用して母国へ帰った人たちがいたという背景があります。家を買った人たちもいて、子どもたちもここで生まれて育った。学校にも通っている。これからも住みつけたいという外国人もたくさんいて、住宅ローンの問題もあるんですが、今でも頑張っている人たちが、私たちの周りには多くいます。

外国人の人たちと日々接して7年目になりますが、「多文化共生」ということばは、その頃から普通に使われていました。多文化共生学科もできるくらい今ではメジャーになっていますが、この言葉は私たちのリーダー

である田村太郎さんがつくった言葉で、13年前、阪神大震災がきっかけでつくったそうです。当時は関西では外国人がたくさん住んでいて、その方々が災害で言葉もわからず、何の情報もわからない。ライフラインが整っていないとか、困っている外国人の人たち向けに電話相談、情報発信を、ラジオを使って支援をしたのがもとになって、こういうものをつくられたそうです。多文化共生というのは、さまざまな文化・生き方がともに共存する社会であって、自分が自分らしく生きる社会と意味づけられています。外国人が、日本に滞在しているお客さまということではなく、私たちと一緒に、生活者として地域の一員であるということをお忘れはいけないということではないかと思います。そういう意味で、国籍とか文化の違いを意識せず、理解しあって、共に暮らす社会を目指してやっています。

私たちは多文化共生社会を目指して日々活動していますが、具体的には何をしているか。一言でいうと、外国人の青少年に就労支援をやっています。一般的に外国人の子どもたちが通っているところ、彼らはどこに所属しているか。日本人の教育委員会がつくっている公立学校、母国の人たちが運営している外国人学校、豊橋にはブラジル人学校が二つあって、豊橋の隣の静岡県にも外国人学校があって、3つあります。外国人の子どもたちは義務教育ではないんですね。途中で学校をやめたり、日本の学校をやめて外国人学校に移ったり、行ったり来たりしている子どもたちがたくさんいます。どうしてやめたりするのかというと、金銭的なことが一番多くて、親が仕事につけなくて、生活保護とか、失業手当をもらっている。学費が安い方に移りたい。高校に行ける日本語レベルを持っているが、学費が高いから行かせることができないとか、そういう子どもたちも多くいます。そのままほっておくと、友だちができない、基礎学力も伸びない、何よりも二つの文化、背景がある。ブラジルと日本と二つあって、自分の母国語と日本語のどちらを話したらいいか、思考回路がめちゃくちゃになってしまって、自分の居場所が安定しないという問題が出てきます。

学校に行っていない子どもたちの背景として、小学校で勉強もできて日本人と変わらないくらい学力がトップクラスだった子どもが中学に行き全然できなくなる。母国語で勉強しなかったり、自分の言語が定まらず、学習言語だけを頭に入れていくと追いつかなくなる。思考回路が限界になって、学校の勉強についていけなくて、

途中でドロップアウトしちゃう。そういう子どもたちを多く見てきました。彼らは義務教育ではないので学校を自由にやめることができるので、アルバイトを始めたり、限定された仕事についてもまた、やめていくということを繰り返す若年層の外国人労働者もたくさんいます。その原因の多くは、その子たちの親の労働条件だったり、派遣会社を通した日本独特の間接雇用が普通になっている、そこに問題があるのではないかと考えています。

どこにも居場所がない子どもたちが学校に行かなかったりすると、住民票もない、義務教育でもないということから、地域社会から顔が見えない存在になっていきます。ひきこもりとか、不良とか、非行に走る子どもが多くなると治安も悪化する。本来は労働力になる若い有能な人材を、社会が損失してしまっているのではないかと考えます。

具体的にどんな問題があるのか。先程の話で、小学校の作文で自分の将来が描けないということのように、外国人の雇用は、まだまだ職種が限られています。派遣から抜け出せない。派遣というのは手取りが高くて、その場で月50万円とかもらえる。不況になる前には残業をやると50万くらいもらえる世の中でした。今の生活ができればいい、という感覚をつけてしまって、私たちがいう「正社員」という考えがないんですね。外国人の新しい働き方として、先進事例やモデルとなる人が必要だと。「想像してみて」と青少年たちに言うんですが、サッカー選手とかファッションモデルそれくらいしか出てこない。ヒーローがない。想像できないから青少年たちが自分の将来を描けない。そういうことを目の当たりにしました。日本人と同じように職業の選択ができるように、次の二つのミッションを掲げてやっています。一つは、どんな立場の外国人の子どもたちも、日本人と同じような人生設計をしたり、それに向けて地域社会に出るための勉強をしていく場をつくり、もう一つはその就労支援としてトレーニングする場所づくりに取り組んでいます。もう一つプラスすると、2カ国のルーツをもつ外国人の子どもたちにしかできない仕事を、母国でも日本でも、活かせる仕事を造って行きたい。そういう人たちを生み出すサポートをしていきたいと思っています。

事業組織的には理事会があって、本部があり、その下にいくつかの事業があります。先ほどのミッションの通り、外国人の労働者の子どもたちが日本人と同じように将来、自分の目標を持てるような場所を造る。そこをサ

ポートすることを目標に掲げて、いくつかの事業をやっています。ジョブトレと虹の架け橋事業。そして就労支援。就労だけではなく、小さい子どもたちだと勉強も大切なので、就学のための支援をやっていて、こちらは国の事業でやっています。もう一つは収益事業です。

私たちの団体の設立背景ですが、最初はボランティアのメンバー4人から始めました。就労支援の必要性、ミッションを共有できたメンバーで立ち上げました。その後、準備をしつつ、2006年夏、4年目にNPO法人を設立して、国の事業を始め、今はボランティアもスタッフも含めて30名で、この事業に全体で携わっています。年齢もさまざままで、70代から18歳まで。その中でトレーニングをしてきた最初のロールモデルの人が、ここで就職して働いています。

こういう事業内容をやっています。母国から日本へ来た外国人の子どもたちが、どこへ相談にいったらいいか、行き先、道筋がばらばらで錯乱しています。支援をやっているグループも、豊橋にあります。個々で動いていてまとまりがない。欲しい支援が受けられない。どこへ行ったらいいかわからない。情報が錯乱している状態なので、そういうものをまとめて子どもたちが日本へ入ってきた時、年齢によって「まずはこちらに行ってください」という受け入れシステムを最終的には作っていきたいと思っています。

ジョブトレーニング、仕事につくための居場所づくりでは、2006年から始めているメインの事業ですが、途中で諦めたり、家にひきこもったりしている子どもたちを外に出す居場所づくりから始めました。同じような境遇の子どもたちの居場所を作って、日本語の得意な子どもたちは、日本語の資格になるものを身につけようと日本語能力試験を目標に掲げて勉強をします。2つの文化を持っていることを武器に、母国語を引き延ばす母国語授業もやっています。もう一つ大切にしているのが人生設計。総合事業でやっていますが、その中でマネープラン、何歳で結婚して子どもを産んで、どのタイミングで家を買うか、自分の人生プランをつくる事業など、3本柱でやっています。

一番喜んだのは、子どもたちより保護者でした。保護者は相談先が出来てよかったとのことで日本人と多少違う背景があるので、外国人の人たちだけの居場所が出来たところが大変喜ばれました。2006年から手さぐりで始めてきて、システム化するためにも、ロールモデルを

育成しようと、2007年から5人に絞って、その子どもたちを、まずは仕事に就く出口まで引っ張っていこうとしています。4年経って、今ではその子たちがここで働いています。

勉強だけではなく、重要視しているのは仕事を意識した支援。勉強しながら勉強したことを活かせるためには何をしたらいいか。それは本当の仕事をやらせることだと思うんです。NPOと、もう一つ株式会社を作って、翻訳の仕事や、ウェブデザインの仕事依頼をいただいて、その仕事は会社のブラジル人の大人のスタッフが青少年に教えながら、本当の仕事を彼らに指導しながらやっています。これがその時に出来たものです。こっちはガス会社のステッカー、翻訳もしています。デザインも日本人では考えつかないようなものを作ります。外国人は文字の文化ではなく、どれだけ大切な情報を目に焼き付けるかが大切で、そのためには文字を減らして、目に止まるようなデザインにすることなんです。そういう感覚がわかるのは、2カ国のルーツを持つ青少年たちなので、そういうところが活かされる仕事ではないかと思えます。その他にもホームページをつくったり、ガソリンのステッカーをつくりました。これは急に電話がかかってきて「外国人の人たちがセルフでガソリンを入れるんだけど、全然、違うものを入れる。ハイオクなのにレギュラーを入れたり、そういうトラブルが起きて、車も置きっぱなしにする人たちが多い」という相談を受けて「それではステッカーをつくりましょう。手順表を見ても外国人の人たちは見ないから、1カ国語で目につく色を使ってやりましょう」と。そういった経緯で、青少年とガソリン用のステッカーをつくりました。今でも、ガソリンスタンドで使ってもらっていますが、自分たちのやった仕事が社会に使われているということで、青少年にとっても達成感や社会にかかわれているという自信にもつながって、良かったと感じています。目に見える仕事できて、良かったというエピソードの一つです。外国人の子どもたちは日本で生まれて、日本語で授業とか生活をしているんですが、ほとんどの人は家ではポルトガル語で話しています。そういう青少年たちは、生まれながらにして日本とブラジルのルーツ、言葉や文化を自然と身につけているので、そういう知的財産を活かせる仕事を造りだしていくのが、私たちのもう一つの課題になっています。

そして、なぜ彼らに、人生設計が大切なのか。それは、

知り合いの不動産会社の社長さんが、若いブラジル人の女性を雇ったときの話しです。研修期間は18万円で働いて「あなたは働きぶりがよいので継続して正規で働きませんか」というと「お願いします」と彼女はいました。ところがすぐ辞めるんですって。なぜそういうことが起きるか。彼女は正規雇用になると、社会保険、労働保険を引かれるのを気にして、辞めたという。なぜそうなるのかというと社長さんが言うには「そういうことを知らない外国人の人たちはコロナル・メンタリティが強い」とのことでした。とくにフィリピンにも多いらしいですが、とにかく今の生活をしていく、派遣会社からの手取りを重要だと思う。何かに備える生活というより、正規社員より手取りの多い派遣の仕事になってしまうことになる。社長さんから現場でのエピソードを聞いて「あなたたちができるのはこのように社会で働きに行く前に、こういう場所があるならば、若いときにしっかりと人生設計やマネープランを教えないと、身につかない。本当に必要なことだ。」と言われ「なるほどな」と思って、このことを重要視しています。4年間やってきて、この子たちが、スタッフとしてお手伝いしてくれていますが、それも紆余曲折がありました。途中で親が失業になって代わりに働かないといけないからアルバイトをさせてくれ、勉強を途中でやめて働きにいくとか、親も親で、それをよしとしてしまう。今しかできない勉強を、この場所でやらないといけないというのを親も含めて根気良く話していかないといけないことを、この事業で感じました。

不就学の外国人の青少年たちの支援システム。日本語のスキルを身につける日本語の事業、母国語の授業。技術のパソコンの事業があって、その基礎を学んだ上で、ジョブトレーニングという仕事の期間を経て、最終的に会社に就職して、それぞれの道に進むという、一連の流れをシステム化した図になっています。今はロールモデルの子どもたちで日本語が得意な子どもたちを集めてシステム化しています。一連の流れは出来たんですが、次のステップとして日本語が全く出来ない子たちが、日本の社会でどう受け入れられていくか。そこを課題にしていけないといけないなと思っています。その場合に重要なのは、まず日本語のスキルを身につけること。日本語ができない子どもたちでも、日本で働いて、母国に戻っても、日本にいたという成果が表せるような支援方法を考えていかないといけないということを現在課題として

上げています。

ジョブトレーニングで通訳やデザイン、翻訳の仕事を紹介しましたが、不況になって、日本語ができる人でも、そういう仕事につけるのは限られてきます。不況になってから再就職を求める失業者が増えてきて、外国人の人たちが、どんな仕事につけるか。しかも失業して時間もなくて、何ができるんだろうと思ったときに、やはり介護の仕事ではないか、というのが一つ。それで今、介護支援を始めています。もう一つの理由は介護の仕事は日本語を使わないから、簡単だから、ということではなく、介護は絶対に必要になってくる。人口ピラミッドにあるように40年後には少子高齢化が進んで、絶対に外国人の担い手が必要になる分野です。今は、それを見据えて日本政府はフィリピン、インドネシアから介護職員や看護師の受け入れを始めていますが、世界的にみると日本は遅れているんですね。フィリピンは、どこの国でも来てくれと手をあげてくる国が山ほどあって、日本は数年前から受け入れを始めたくらいで遅いです。フィリピンも、今後逆に選ぶ立場になる。日本政府はたかをくくっているのではないかと思います。フィリピンとかインドネシアから来ると思っていると、そうではないんですね。欧米、アジアでは取り合いが始まっていくと思います。

しかし、フィリピンとかインドネシアとか日本にルーツのない人に来てもらわなくても、もう実際にいるでしょう。日本に外国人が、担い手になってくれる人が。フィリピンとかインドネシアの人たちは在留資格も定住者資格もないですよ。その点、日系の外国人の人たちは定住、永住権を持っていて、ビザ的にもしっかりしている。日本のルーツを持っているから日本の文化もわかっている。そういう人たちを介護分野の人材として受け入れるのが近道ではないでしょうか。国の方でも、委託を多く出して、介護事業をやっているところが多くなってきました。私たちも始めまして、今年1月～3月、介護職員講座の基礎を教えています。ここでは介護の仕事って何か、ということから教える。外国人の人たちは日本人と違って、お年寄りの人たちをすごく大切にす文化です。介護施設に入れるという概念が少ないんです。ご近所付き合ひも盛んで家族ぐるみでお年寄りを大切にします。介護という言葉より、お年寄りの食事の世話、お風呂、寝る時の世話、排泄の世話が仕事として確立しているということ、彼らは知らない、介護と

いう仕事があるということ、基礎的な授業をやっています。この事業を始めたのが去年で、まだ1年たっていないんですが、今年秋からは資格を必要とする人たちも多いので、介護ヘルパー養成講座2級を受けられるよう、準備しています。このようにベッドをお借りして介助の実技をやっています。この人はスタッフで日系ブラジル人の3世の人です。彼がポルトガル語を通訳しています。募集をしてみて気づいたのは、不況に入ってから再就職を求めている年代は、こういう感じなんだという実情を知りました。青少年よりも40～50代とかは次の派遣の仕事に就く確率が狭まって、仕事を見つけたいけど見つからない、という年代の人たちが多く応募してきました。言葉がたどたどしくてもできるのは介護ではないかと。外国人の人たちが、この仕事に向いているなというのは、すでに介護現場で働く人たちの話を聞きにいくと、外国人の人たちはスキップが上手なので、自然とお年寄りにあたたかい振る舞いができるから「もっと働きつづけてほしい、これからもっと外国人の人たちに担ってほしい」という現場の声も多く聞かれています。

介護以外に豊橋の特徴として農業も始めました。豊橋の隣の田原という伊良湖のあたり、メロンやキャベツづくりが盛んで、隣の静岡のミカンとか、農業もひとつの働く場としてつくっていきたくて、去年から始めました。現実的に就職というと農業は限られるので、一人で畑を持つことも、生活していけるだけの仕事になるかという難しんですが、農業の仕事自体、日本では昔からなされている。生活の一つとして農業に携わる農家の人たちがいる。その人たちとの交流も含めて、いい機会をつくっているんじゃないかと思っています。

ブラジルの学校に行っている子どもたち。ポルトガル語しか、わからない。日本語は挨拶程度しか、わからないんですけど、そういう子どもたちが農家の人たちと話をしたり、農作業をする時、コミュニケーションをとらないといけない。お年寄りなので三河弁なんです。よけいコミュニケーションがとりにくい。最低限、現場でコミュニケーションをとる前に身につけておきたい農業用語を農家の人たちに上げてもらって、翻訳して、お手伝いする前に、座学の授業で農業の日本語授業で覚えて外に出る。そして農家の人と一緒に体験します。

この子たち、普通だったら声をかけにくいくらい、サングラスかけて、音楽ボンボンかけて、一見不良チック

な子どもたちですが、すごく真面目に、昨日は丸1日農作業をしていました。カフェの事業もやっています。国の事業の一端で始めたのがきっかけで、継続して経営をやっています。無料冊子に掲載をさせてもらっています。豊橋でも有名な飲食店の冊子です。そこに載せることで、ターゲットは日本人のお客さんにしています。主婦の人たちに、平日の昼間、お友だちとティータイム、ランチとかに来てもらえるようなお店づくりをして経営しています。日本の主婦の人たちがターゲットなので、顔のキレイな外国人スタッフを出し、彼を目当てに来てくれなかなという作戦は結果、大成功でした。奥様方に「今日のはの子、いないのかしら」というお声やブログにも書かれて「あのイケメン、今日はいなかったわ、サクラかしら」というメッセージも頂いています。ブログにも、さりげなく書かれているので、チェックしている人がいるんだなど。料理をつくらしている人はブラジル人のシェフですが、この豊橋だと日系ブラジル人という、怖いとか、かわりにくいとか、ブラジル人コミュニティの独特の世界、リトルチャイナのような雰囲気があるんです。ブラジル人向けに経営している飲食店だけがたくさんあって、今は潰れているんですが、そういうところを日本人が目当たりしているの、外国人が経営しているところは外国人しか入ってはいけないのではない、抵抗感がある印象をうけてしまいます。そういうのを取っ払いたいということで、しつらえも居心地のいい、ぬくもりのある木の空間とか、味付けはブラジル風の脂気のあるものではなく、野菜中心だったり、薄味で、盛りつけも気をつけて色鮮やかに、器もこじられたものを使ってやっています。これがブラジル人シェフにとっては新たな発見で「ブラジル人が好む嗜好しか考えてなかったけど、日本人のみんなに来てもらえる店にするのに、こういうところに気をつけないといけない」という気づきとか、不況になったことで、日本人向けにして、日本人のみんなにたくさん来てもらわないと飲食店の経営は続かないということも気づくことができました。豊橋に来たら寄ってほしいです。若い人たちの意見も聞かせてください。彼はジョブトレーニングで、最初のロールモデルでもあり、実際に接客の仕事をしています。

もともとカフェとしてつくった建物ではなく、農的な暮らしを進めている大家さんが、新しいものを豊橋に吹き込みたい、環境的にもいい、農業とともに暮らせるよ

うな空間をつくりたい、ということでお互いそれに共感して、一緒に、こういうものもやっています。

ここに来ることで、外国人の子どもたちが、日本語も学べて、日本語だけではなく、将来のことも見据える。ここで農業の道を考えるきっかけになったり、美容師になったり、調理師になったりする、出口につながるようなことを知る機会、ここに来ることでそういう世界を知る、入り口から出口を想像できるようなジョブトレーニングセンターを将来的にはつくっていったらなと思っています。

たくさんの事業をお話しましたが、何かわかりにくい点、この点を詳しく教えてということがあればお話ししたいと思います。いかがですか。

司会 どうもありがとうございました。質問を受け付けたいと思います。

質問 NPOで子どもたちを支援しながら、私もインターンをしたことがありますが、そこで子どもたちを支援するのに一番難しいのは、子どもたちに来てもらうことだと。どのように子どもたちを確保しているのか。2つ目は子どもたちのプレスクールがあったんですが、外国から来ている子どもたちに日本の教育をする、そこで日本語を学ぶ。愛知県は日本語教育について、NPOとして教育委員会が支援していることはないんでしょうか。

小野田 1点目。どのように子どもたちを集めているか。日本人のメンバーが中心にやっているNPOなので「来てください」といっても、なかなか来てくれないんですね。ロールモデルの子どもたちは、もともと私たちがボランティア団体でやっていた中で、こういう子どもたちに来てということは目星がついていたので、そういう子どもたちの口コミで、同じような友だちにきてもらう。違う分野で集まってきてくれているのは、ブラジル人学校のコミュニティで、実際にコミュニティたちに接しているところに入り込んだことが重要だったのかな。「NPOで支援しています」というと、警戒されて来にくいんですが、コミュニティ同士の口コミで、さらにブラジル人学校と一緒に組ませてもらって、先生方の方から「うちでは教育しかできないけど、ここでは日本に長く住むには仕事につくためのトレーニングができるから、日本語もしっかりと教えてもらえるところがあるよ」ということを、ブラジル人コミュニティの中から伝えてもらったことで信頼感ができて、私たちとかかわれるよ

うになったのではないかと思います。

もう一つはプレスクール。私たちはやっていませんが、豊橋市の委託で去年から始まった2校、ブラジル人の託児所で小学校へ入学する前の6歳児の子どもたちを集めて、日本の学校に入った時に必要となる給食とか、独特のカリキュラムを学ぶ場所を始めたそうです。それをやっているのがボランティア・グループで、今年も引き続き、5つに広げてプレスクールを始めているそうです。

質問 プレスクールは委託事業としてNPO団体がやっているということですね。

小野田 そこが申請して受け取ってきている。私たちとしては、そういう年代の子どもたちが来た時、情報を流したり、NPO同士のかかわりがあるところなので、情報交換はしています。

質問 就学前の子どもたちだけを対象にしているということですか？

小野田 そうですね。プレスクールは、6歳とか。

質問 中学・高校くらいの子どもたちがブラジルから来た場合、豊橋ではプレスクールのように、学校に入る前の段階で勉強する場所は現在ありますか。大阪にはあるんですが。

小野田 豊橋の場合はなくて、どうしているかというところ、直接、日本の学校だったら繰り返し授業で国際学級が、外国人が多い地域には配置されています。普通の授業に繰り返しで国際授業で日本語を勉強したり、基礎を勉強する方法です。

質問 日系人の親が、いずれ帰ってしまうことがあるかもしれないという場合、子どもたちが日本で就労することに、日本での支援活動をどうされているのか。日系ブラジル人を対象に活動されていると思いますが、京都は在日朝鮮人の人たちと中国帰国者たちがいますが、そういう人たちの支援団体の中で、ゆるやかなネットワークをつくっていこうという取り組みがあるそうですが、豊橋では日系人の支援する団体と、それ以外の支援をしている団体とのネットワークは、どう築いておられるのか。

小野田 外国人の子どもたちは二つのルーツを持っているので、日本に住むという気持ちが青少年は多い半面、親は帰国したいというケースが多いです。親は、しばらく日本に住んで、いずれは…という感じでおられるようです。いずれ帰るのであれば、日本で経験したことを、ブラジルに帰っても活かせる仕事を、次のステップとし

て考えています。これから始めるところなんですが、日本で得たスキルを持った人たちが、ブラジルに帰っても、活かせるようなツアー事業をつくりたいと。来月くらいに、モニターとして2カ月ほどブラジルに行くんですが、帰国したら、日本での仕事がブラジルでは活かされないということがあるのは、もったいないなど。ワールドカップとかオリンピックで、ブラジルが盛り上がっているので、関心が高くなるブラジルに、日本人たちをつれていくツアーを。そのツアーを案内する人たちが日系外国人の子どもたちだったら素敵じゃないかと思って、日本にいても、日本のおもてなしを学べて、母国に帰って母国で日本人に説明するツアーコンダクターの仕事ができる。そうなったら、日本でも、ブラジルでも、夢が広がるのではないかと思います。介護、農業だって、戻った時、ブラジルで日本の仕事を活かして介護、農業の道も広がるのではないかと。母国でも活かせるものを、今は練習しているところです。

同じような活動をしているグループとのネットワークに関しては、豊橋では限られていますが、愛知県全体ですと、豊田とか浜松、みのかもなど多文化共生にかかわる団体さんと、月1回、情報交換や勉強会を始めています。そういうことにも参加させてもらっています。

司会 それではこれで講演会は終了とさせていただきます。豊橋からお越しいただき、ブラジル人の、経済危機の中での就労の問題に対して、NPOとしてどう活動していくか。先駆的に行っておられる、興味深いお話をお聞かせいただきました。もう一度、小野田先生に拍手を送りたいと思います。どうもありがとうございました。これもちまして政策科学会の春季講演会を終了したいと思います。どうもありがとうございました。

付記

本稿は、2010年6月25日に行われた立命館大学政策科学会主催による春季公開講演会の全記録である。